

KELES Newsletter

関西英語教育学会
ニューズレター

2005年(平成17年) No.1 1月号

編集発行: 関西英語教育学会(KELES)

事務局

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

TEL: 075-466-3261 (直通)

E-mail: keles@infoseek.jp

立命館大学産業社会学部 吉田研究室内

FAX: 075-465-8196 (大学事務室)

Home Page: <http://keles.hp.infoseek.co.jp/>

地区セミナー報告、第8回卒論・修論セミナープログラム、第9回研究大会発表者募集

英語教育界前進のために

会長 瀬川 俊一

「寒中お見舞い申し上げます。」本年最初の号ですので、既に松の内を過ぎてはいますが、「謹賀新年。」

今年は、教育界激変の1年になるように思えます。小学校から大学までの、学校間の枠組みや学校内の枠組みを取り外しての、教育研究・教育実践が推進される年になると予想されます。

本学会が設立の理念としている、理論と実践の融和を図りながら、教育研究・実践に取り組むために、会員の皆様方相互の連携を更に強くして、英語教育界前進のために貢献出来る1年にしたいと思います。

卒論修論セミナー迫る！

卒論修論セミナーが目前に迫りました。今年も力のこもった発表を是非ご覧下さい。これから論文を書こう、研究テーマをどのように掘り起こそうかと考えている人は必見です。詳細は同封のプログラムをご覧ください。

日時: 2005年2月12日(土)

会場: 同志社大学今出川キャンパス

大阪地区セミナー報告

テーマ: 明日の授業につながる「英語授業実践学」の展開

日時: 12月4日(土)

会場: 関西大学千里山キャンパス

担当理事: 竹内 理 (関西大)

大阪地区セミナーは、あいにくの悪天候にも関わらず、140名の参加者を数える盛会に終わった。約100名収容の教室に補助席を出す状態で、講師と参加者の熱気のため、時ならぬ冷房を入れる必要が生じたほどであった。本セミナーを盛り上げて頂いた講師・パネリストの先生方、参加者のみなさん、大阪地区運営委員の皆さん、そして、裏方としてセミナーの運営にあたってくれた関西大学大学院生のみなさんに心より感謝いたします。

(竹内 理 関西大)

ワークショップ-1

「明日の授業から使える音読指導の大技・小技」 廣瀬 旭 香川県立飯山高

毎日音読を2時間行い、その結果TOEICで950の高得点を得たことを紹介し、講師はワークショップを始めた。様々な指導方法は幅広い先行研究事例に基き、講師は満員の会場を動き回り、参加者は生徒の立場になり活動に取り組んだ。具体的には、足踏みをしながらリズム練習、ペアでの活動、Read and look-up、モデルに合わせて読むもの、音読しながら筆写する活動、読み終えるたびごとに向きを変えさせ進捗状況を把握する方法、などを体験した。教室での活動を、実際に教える側が行っていることが大事である。参加者はまさに音読の大技小技を体得できたワークショップであり、脳の

みならず、お腹も活性化し、昼食がおいしくいただけのワークショップとなった。

(溝畑 保之 大阪府立鳳高)

ワークショップ 2

「クラスみんなで実践的コミュニケーション能力を培う授業作り」

稲岡 章代 (姫路市立豊富中)

稲岡先生オリジナルのチャンツからワークショップが始まった。先生のスピード感あるリードの下、楽しみながら、そして徐々に声も大きく自信を持って言えるようになっていく不思議な過程を体験できた。その頃には会場はあかるい雰囲気にも包まれていた。その後も英語に苦手意識のある生徒でも思わず引き込まれるような活動を紹介していただいた。指導テクニックだけでなく、生徒の気持ちを大事にすることの大切さを改めて学んだ。「忙しい生徒の気持ちの切り替えをする。」「顔を英語バージョンにする。」「一人一人の表情を見て次のアクティビティに進む。」先生がおっしゃられたこれらの言葉を私は胸に刻んだ。

(梅本 多 河内長野市立天野小)

シンポジウム

「小学校の英語活動：小中連携の視点から」

コーディネーター： 齋藤栄二 (関西大)

パネリスト： 梅本多 (河内長野市立天野小)

直山木綿子 (京都市総合教育センター)

中西浩一 (高槻市教育センター)

齋藤先生が、「日本の英語教育全体のカリキュラムとシラバスをどうするかという意味では、小学校は中学校・高校にも大きな影響を与えることになる」と、「小中連携」を考える意義をまず述べられた。そして梅本先生が「天野小学校の英語科をどうしてきたか」について、子どもたちの英語との出会いからゴールまでのカリキュラム、単元開発、コミュニケーションの諸相、評価、人間関係構築、教科間連携などについて、

ビデオ映写をまじえて述べられた。直山先生は、まず小学校と中学校の英語指導に関しての位置づけ、ねらい、学習内容、教材、指導者のそれぞれを対比して説明され、複数の小学校出身者が1つの中学校に入学する現状をふまえ「小中連携」が必要であり、「小中連携」においては、9年間での1つのカリキュラム作成が中学校によりなされるべきと指摘された。中西先生は「学校は内側からしか変わらない」をキーワードに「小中連携の視点(中学校側から)」と「(小中連携で)具体的に何をするか」を示され、「連携のために必要なこと」として、学校全体の授業改革(連携)の必要性を言及された。具体的方策として、授業(学習)を最上位におき、その下位に生活指導・クラブ指導・進路指導を据えた取り組みが必要であると結ばれた。最後に、齋藤先生が、いままでと同じことをやっているのではない激流の時代における小中連携の検討の必要を述べられ、熱いシンポジウムが終了した。

(高橋昌由 関西大大学院)

講演

「英語コミュニケーションの情意と動機 - 異文化接触研究から見えてくるもの - 」

八島 智子 (関西大)

異文化接触の研究を長年続けられている八島先生より、高校生が一年間英語圏に留学するとどのような英語を話すようになるのかといった研究をもとに、大変興味深い示唆に富むご講演をいただいた。留学前と留学後の高校生の発話を実際に分析された結果、発話量が増え、速度が増し、タイミングとリズムに特に変化が見られ、同じ構文を繰り返すなど談話的特徴が見られたが、これは相手と長く話したいために、無意識に相手に合わせようとして習得したのではないかとの考察であった。また留学中、人とコミュニケーションしたいとの強い対人接触

動機がある反面、英語力不足、自信の無さから友達が出来ないことへの焦りが生まれ行動が消極的になってしまうという対人関係の苦闘を乗り越え、新しい自分や英語が言葉だという発見を通して相手と意味を共有できる喜びを体験していく。つまり不安や自信喪失の悪循環をソーシャルスキルの意識化や行動化、そのサポートを行うことで、異文化接触を肯定的に捕らえ、コンフリクトを経験しながら、認知・行動・情動面の柔軟性を増し、悩みを解決することが出来る。そこには情意的側面の影響も大きく、教室内でも異文化でも経験することであると説明された。最後に、生きた英語を学ぶとは、言葉が埋め込まれた状況を体験し状況に埋め込まれた意味を理解し、他者との相互作用の中で実践することだと締めくくられた。

泉 恵美子(大阪商業大)

兵庫地区セミナー報告

テーマ:「英語教師の自律に向けて - 教員の意識・英語力・授業力・研修の視点から -」

日時:12月12日(日)

会場:神戸学園都市大学交流センター

担当理事: 今井裕之(兵庫教育大)

本年度の兵庫地区セミナーは、12月12日(日)神戸研究学園都市大学交流センターで開催された。58名の参加者(26名が非会員)を迎え、「英語教師の自律」「人間的な教育実践と研究」について議論が行われた。ともすればキャッチフレーズに終わるか机上の議論に陥る危険性を孕んだテーマだったが、英語教育に携わる私たちの経験に鋭く訴えかける説得力の高い言語で理論は語られ、私たちの経験や期待を超える実践・研修の様子が示されたことで、参加者各々が自らの教師力をより高める活力を与えられたように思う。ご参加いただいた皆様に深く感謝申し上げたい。

(今井裕之 兵庫教育大)

講演

「人間的な実践と研究を求めて 田尻実践、アクション・リサーチ、アレント哲学」

柳瀬 陽介 (広島大)

講演は、「人間的」であることの考察のためにハンナ・アレントの哲学の枠組を用いて、それを基に、「実践」として田尻悟郎氏の授業、「研究」としてアクション・リサーチについて考えるという構成で行なわれた。

田尻実践に関しては、アレント哲学の「行動的生活」の分析を基に、「労働」(labor)、「仕事」(work)、「活動」(action)の区別がなされ、田尻実践は英語学習を「仕事」としてだけではなく、「活動」としても捉えていることが述べられた。ちなみに「労働」とは生物学的生き残りのこと、「仕事」とは生産物の合理的制作、「活動」とは、人間が他人の前で自己表現をすることである。現代の英語教育は、ともすれば、英語学習を、テスト成績という生産物を生み出す「仕事」として捉えるが、英語教育を「仕事」だけの観点から捉えることは、「人間的実践」としては不十分であり、生徒が英語使用を通じて自己表現 = 自己発見 = 自己開示を行なえるよう「活動」として捉えることが重要である。

アクション・リサーチ(AR)においては、横溝(2004)に従い、英語教育では、実験研究に類する「仮説-検証型AR」が多いが、ARには「課題探究型AR」もあることが述べられた。後者のARの価値を認めるには、科学至上主義の考えから解放される必要があることをアレント哲学の「静観的生活」の分析から論じた。アレントによるなら、考えること/理性/意味は認知/知性/真理と異なるものであり、前者の意義を理解することが「人間的な研究」のためには重要である。(柳瀬陽介 広島大)

シンポジウム

「英語教師の自律に向けて - 教員の意識・英語力・授業力・研修の視点から - 」

提案者・司会(前半)中田賀之(兵庫教育大)

提案者 竹内 理 (関西大)

提案者 泉 恵美子 (大阪商業大)

全体討論コーディネーター(後半)

藪内章彦 (兵庫県立太子高)

本シンポジウムでは、近年関心が高まっている英語教師の自律について、教員の意識・英語力・授業力・研修の視点から議論した。

まず中田が、教師の自律には教師自身がカリキュラムや材料の実践者とみなすのではなく、葛藤を伴いながらも助け合い、自己および互いをクリティカルに分析しようという意識の变革が必要であると論じた。そのためには、時間的・精神的余裕はもちろんのこと、英語教育に携わる者の間での意識の乖離をなくす一般的基盤を果たす言語評価基準表作成という環境の整備が急がれると指摘した。

次に竹内氏が、現在一般的に求められている英語力の危険性を指摘し、真に英語教師に求められている能力は英語力(多面的)・授業力・人間力から構成される英語教師力と考えるべきであると主張した。さらに、特に重要で養成が可能な授業力について動機付けモデルを例に説明され、その授業力を高めるような研修の必要性を説いた。

最後に泉氏が、海外の現職教員再教育プログラムとも比較させながら、英語教員集中研修の現状・課題・成果についてまとめた。その上で、現在氏が関わっている英語教員のアクションリサーチプロジェクトの内容を紹介し、あるべき教員研修の姿について論じた。

後半の全体討論会では、藪内氏が中心となり、本テーマについて聴衆も含めた意見交換がなされた。「英語が使える日本人」育成のための行動計画では「英語教員の資質向上」が

テーマとして挙げられているが、このような場を通して英語教育にかかわる様々な立場の方が議論し、お互いの職業人としての質の向上を図るべきではないかと考える。

(中田賀之 兵庫教育大)

京都・滋賀地区合同セミナー報告

「がんばれ！若い先生たち！！」

テーマ:「がんばれ！若い先生たち!!」

日時:2005年1月8日(土)13:00-17:30

会場:京都教育大学 F棟22号室

担当理事:西本有逸(京都教育大)

実践発表

「脱！ ダメ授業」

高橋 渉(茨木市立南中)

まず、高橋先生はご自分の悩みの変遷を素朴な語り口で話され、省察・整理された。授業の失敗談と成功談の両方を生徒への配布プリントで具体的に紹介し、基礎基本を「音声から文字へ。音読からスピーチへ。ライティングはこつこつ鍛える。英語はコミュニケーションの道具であり使う勇気を育てることが大切。」と結論づけられた。授業アンケートを頻繁に実施されており、授業の改善に努められている真摯な姿が印象に残った。

《ディスカッションのポイント》

リスニング中心の内容理解の授業の中で聴いて理解しようとしているが理解できない生徒・理解する力があるのに聴こうとしない生徒・理解する力がなく聴こうとしない生徒をどのように指導していけばよいか？

「授業は楽しいだけじゃダメなんだ ~できた！と実感できる英語の時間を目指して~」 佐藤亮太(京都市立洛風中)

不登校の生徒が中心の所謂、特区中学校に勤める佐藤先生は赤裸々に日々の実践を話された。英語の歌・TPR・音読に力を入れ、生徒が「へえ～」と納得できる工夫を紹介された。自信がない、達成感を味わった経験が少ない生徒が「できた！」と実感できる瞬間こそが大切であると力説された。具体的にはリーディングマラソンの実践(自分の進歩を知る)・自己評価シートの使用(自分を振り返る)・クイズ形式での出題(成就感を味わう)等について話され、teachingではなくeducationの重要性を提起された。

《ディスカッションのポイント》
スローラーナーをどのようにフォローしていけばよいのか？

「私の授業 ～スローラーナーと共に～」
澤村幸子(大阪府立野崎高)

澤村先生は授業で気をつけている点として、1)できるだけ指示は英語で行う、2) visual imageを与えて注意を引き飽きさせない、3) acoustic imageを与えて記憶に残す、4) 単語小テストは生徒同士で採点し合いコメントをつける、5) プリントを仕上げ提出する(未提出の生徒には**大至急!**のハンコ作戦)、の5つを挙げられた。そして、

- i) プリントが埋まれば満足で答えを待ち、自分で考えない。
- ii) 成績の上位者と下位者の隔たりが大きく授業の焦点をどのレベルに合わせるか。
- iii) 授業中の辞書指導に時間がかかる。自分で調べようとしなない。
- iv) 音読に時間を回したいが、授業のどこをどう削るべきか？
- v) 声が出ない。すぐに飽きてしまう。
- vi) 習熟度別の少人数授業での効果的な文

法指導とは？

以上の悩みについて解決法を問われた。

《ディスカッションのポイント》

上の1)～6)の悩みについて。

「生徒の顔が晴れるときと曇るとき
～定着につながる音読指導と文法指導～」

中川めぐみ(京都府立南丹高)

中川先生は音読指導と文法指導に絞って授業の様子・生徒の反応・問題点を発表された。

音読指導について

- ・ 定期考査でリスニングや音読指導に力を入れているクラスの方が内容理解中心のクラスよりも毎回平均点が5点程度上である。
- ・ 低学力の生徒もがんばって参加している。
- ・ マンネリ化してきている。

文法指導について

- ・ 帰納法を理想として多くのインプットの後に形を説明している。
 - ・ 規則や構文の形を早く知りたがる。
 - ・ 記憶保持が続かず、定着に繋がらない。
- 《ディスカッションのポイント》
- ・ 限られた時間の中でどのような文法指導が定着や習得に繋がるのか？
 - ・ 思考を必要とし、刺激のある、全ての生徒が活動しやすい音読のペアワークとは？
 - ・ 語彙や文法について記憶保持を伸ばすための活動とは？

ディスカッション

上の《ディスカッションのポイント》を中心に発表者別に4つの部屋に分かれてディスカッションを行った。

講演

「いかにして困難な状況を乗り越えるか
～英語教育を支える先生方のために～」

鈴木 寿一（京都教育大）

セミナーの締めくくりは鈴木寿一先生の
「いかにして困難な状況を乗り越えるか～
英語教育を支える先生方のために～」と題
する講演であった。

- (1) 充実した人生にするために挫折・苦しみ・悲しみを乗り越えるために15個のcreedを挙げられた。主なものは
 - i. 挫折や苦しみや悲しみは将来の飛躍のための必要条件である。
 - ii. 夢（目標）を持とう！たとえ、実現できなくても、そのための努力は必ず別の形で実を結ぶ。
 - iii. 他人との比較をやめ、過去の自分をライバルに絶対評価をしよう！
 - iv. 教員をやめたくなくなったら生徒のためになることを一生懸命やってからやめよう！そうしているうちにやめたくなくなる。
- (2) 多忙な毎日を充実させてプロの教師となるために、これもまた15個のcreedを挙げられた。主なものとして、
 - i. スキマ時間をうまく使おう！
 - ii. 専門雑誌を最低1冊は定期購読しよう！
 - iii. 最低1つは研究会あるいは学会に入って、例会や支部大会、全国大会に最低年1回は参加しよう。会員になったら10年以内に必ず研究発表、実践報告をすることを目標にしよう！
 - iv. 毎年テーマを決めて実践し、文章化して残そう。できれば研究会の会誌や学会誌、専門雑誌に投稿しよう！

v. 疲れているときは、さっさと寝よう！
講演は 同僚との教育観の違い、生徒と合わない、時間がないときに英語力をいかに維持するか、教科指導がうまくいかない、授業がしんどい、これら4つの点についてご自身の体験や実践に基づいて一気に語られた。ユーモアも交えられたが、人生の真実・機微・琴線に触れるナラティブに涙する聴衆もおられた。最後に、英語教師を目指している学生そして若い先生方に対して、「教職は大変だから、私なんかには無理だからという理由で簡単に諦めないでほしい。本当にやりがいのある職業です。」と呼びかけられた。

主催者から・・・

ディスカッションのそれぞれの部屋で、発表者の若い先生方に温かい助言を惜しまなかった先生方に心よりお礼を申し上げます。

他者と交流するなかで、他者に媒介されて、人間は自分のZPD（発達の最近接領域）を拓ける - このことは生徒にも先生にも当てはまる - このような素朴な当たり前のことを実感していただけたら、と願っている。（参加者数：学会会員54名 一般非会員19名 学生非会員35名 計108名）

西本 有逸（京都教育大）

以上、文中敬称略

第9回 関西英語教育学会 研究大会のご案内

- ◆ 日時：2005年（平成17年）5月28日（土）29日（日）
- ◆ 会場：同志社大学 今出川キャンパス <http://www.doshisha.ac.jp/>
- ◆ 内容：実践報告、研究発表、ワークショップ・講演・シンポジウム
 - ・ 講演：高見 健一 氏 東京都立大学（英語学・言語学、機能的構文論）
 - ・ シンポジウム：未定（英文法研究・指導にかんするテーマ）
 - 織田 稔 氏 元関西大学（英語学・英語教育学）
 - 赤野 一郎 氏 京都外国語大学（コ・パス言語学、語法研究）
 - 山本 英一 氏 関西大学（語用論、意味論）

◆ 発表応募部門

- 1) 実践報告（発表20分＋質疑10分）：小・中・高・高専・大等での授業実践に関する発表。日頃実践されている授業の断面を切り取ったり、テーマを絞って実践上の工夫や悩みについてフロアーの参加者に話題を提供していただきます。
- 2) 研究発表（発表20分＋質疑10分）：英語教育を中心として外国語教育および関連分野に関するテーマを扱ったもので、理論研究、実践研究いずれも歓迎です。
- 3) ワークショップ（90分）：最近話題になっている理論的トピックや英語教育をとりまく実践上の問題などについて、特定のテーマを設定してご提案下さい。提案者は2～4名程度（司会者を含む）。

◆ 発表応募方法：

原則として、電子メールに発表応募用紙（Wordファイル）添付での申し込みとさせていただきます。

発表応募用紙を、下記ホームページより応募期間中にダウンロードし、枠内の必要事項をすべてご記入のうえ、電子メール（件名：KELES 発表）に応募用紙（Wordファイル名：ご氏名）を添付して、事務局まで添付メールでお申し込み下さい。

学会ホームページ：<http://keles.hp.infoseek.co.jp/>

学会事務局メールアドレス：keles@infoseek.jp

今年度は、同封の発表応募用紙による郵送も受け付けさせていただきますが、来年度より、業務合理化のため、電子メール、またはオンラインによる申し込みに限らせていただきます。

- 郵送先：〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 立命館大学産業社会学部 吉田研究室内 関西英語教育学会事務局

◆ 発表応募期間：2005年2月14日(月)～3月14日(月)24時

➤ 採否の別の通知：4月上旬

◆ 大会予稿集原稿締切：2005年5月2日(月)必着

➤ 大会予稿集原稿：詳細は、追って発表者の方にお知らせします。

◆ プログラム送付：4月末日

◆ **発表応募の確認**：電子メールの場合はメールで、郵送の場合は葉書で、それぞれ折り返し、受領の旨ご連絡させていただきます。申し込み後、1週間過ぎても通知がない場合は、お手数ですが電子メール keles@infoseek.jp または郵便で、事務局までお問い合わせ下さいますようお願いいたします。

◆ **発表応募資格**：関西英語教育学会会員に限りませんが、連名者については必須条件ではありません。なお会費未納の場合、発表資格を失いますのでご注意下さい。

お知らせ

他学会の動向

JACET 関西支部春季大会：6月4日
(土)和歌山大

LET 春季大会：5月21日(土) 同志社
大(京田辺キャンパス)

新入会員 (2004年12月～1月)

佐々木典子、山藤ゆか、田辺久美子、
安部純子、加藤和恵、藪内章彦、藤原康
洋、佐伯洋一郎 (申込順、敬称・所属略)

同封書類

第8回卒論・修論セミナープログラム

第9回研究大会発表応募用紙(郵送用)

-会計よりお知らせ-

年会費は以下の通りです。まだお支払いでない方は最寄りの郵便局にてお振込み下さい。

1. 一般会員(関西のみ) 5000円
2. 一般会員(関西+全国) 7000円
3. 学生会員(関西のみ) 3000円
4. 学生会員(関西+全国) 5000円

郵便振込：00910-7-39666

加入者名：関西英語教育学会

年会費に関するお問い合わせは会計

担当：岡 良和(人間環境大)まで

oka@uhe.ac.jp

-名簿係よりお知らせ-

入退会の問い合わせ、異動・転居の連絡先に関する問い合わせは下記まで。

〒737-0112 広島県呉市広古新開 5-1-1

広島国際大学 倉本充子研究室

keles_nyukai@infoseek.jp

-会計・名簿係からのお願い-

年会費未納分のある方は、至急納付していただきますようお願いいたします。

特に、2004年度会費未納の場合、2005年度に開催されます全国英語教育学会(札幌) KELES 研究大会(京都)での研究発表や、学会紀要への投稿資格を失うこととなりますのでご注意下さい。

問合せ先：keles_nyukai@infoseek.jp

(発行日 2005年1月21日)